

方向、射角を火炮に与える装置である。この点検を朝夕行い、送話器から火炮の受話器に送られる感度を常に最良に保たれるよう苦心したものであった。

## 野戦兵器廠

### 南方各地転戦

千葉県 鎌田 孝

#### 〔軍 歴〕

昭和十八年二月一日、工兵第三十二連隊要員として、東京赤羽近衛工兵連隊補充隊（東部第十四部隊）に入営。九日、屯営出發。十日、下関出發。十一日、釜山上陸。十二日、鮮満国境（安東）通過。十五日、山海関通過。同日、大東亜戦役支那方面勤務開始。十六日、済寧着。同日第二中隊編入。

六月二十九日、第一期教育終了。

七月十日、昭和十八年度第一次兵科幹部候補生を命

ず。

九月十日、上等兵の階級に進む。

十月十日、甲種幹部候補生を命ず。

十一月十日、伍長の階級に進む。

自六月三十日至十一月三十一日、済寧付近の警備勤務に従事。

昭和十九年一月六日、教育修習のため陸軍工兵学校に分遣を命ず。

一月七日、済寧出發。十日、鮮満国境（安東）通過。

二十日、松戸陸軍工兵学校入校。

二月一日、軍曹の階級に進む。

八月十日、同校卒業、同日曹長の階級に進み見習士官を命ず。同日、将校勤務を命ず。同日、柏近衛

工兵第二連隊（東部第十四部隊）に配属。同日、第二中隊付を命ず。召集兵の教育を命ず。

十月八日、工兵第三十二連隊（原隊、北支より豪北ハルマヘラ島に転進）の楓第四二五八部隊に復帰を命ず。同日、屯営出發。九日、広島着、近衛師

團關係各兵科見習士官引率。二十二日、「牡鹿山

丸」で宇品港出発。

十一月二十二日、昭南着、見習士官を各所属部隊に。

十二月八日、昭南出発。十二日、ジャワ島ジャカル

タ着。十八日、ジャカルタ発。十九日、スラバヤ

着。同日、野戦補充司令部スラバヤ支部臨時勤務

昭和二十年一月十日、陸軍少尉を命ず。二十二日、デ

ング熱によりスラバヤ野戦病院入院（二月四日、

退院）。二十四日、輝連隊第四号により南方軍総

司令部に転属。同日、鯉部隊（第五師団マレー作

戦後スラバヤに駐屯していた）下士官以下八五名

を掌握、同日、昭南に進駐させる。

二月六日、スラバヤ飛行場より海軍の水上機で昭南

へ、その昭南で再掌握。

三月六日、威参編第七六七号により第七方面軍野戦

兵器廠西貢支廠に転属。

自三月八日至十八日、昭防作命第六号により昭南港

の埠頭警備（倉庫内は生ゴムが満積で、専ら焼夷

弾投下による火災）。三月十八日、昭南発、二十日、プライ着。二十五日、

マライ泰国境通過。

四月十五日、盤谷着。十七日、同地出発。十八日、

泰印度支那国境通過。十九日、金辺着。二十日、

同地出発。二十二日南部印度支那西貢着。同日、

第七方面軍野戦兵器廠西貢支廠に到着。

昭和二十年三月二十四日、昭和二十年軍令陸甲第五〇

号、陸甲機密第一七四号、信集参動第一一五号に

より第三十八軍野戦兵器廠編成下令。四月二十五

日編成着手。三十日編成改正完結。同日、第三十

八軍野戦兵器廠に転属。

五月九日、補給部付。自四月二十二日至五月十六日、

明号作戦に参加。

〔想い出の数々〕

仏印メコン河に機材弾薬満載の船が沈没し、引き揚

げ作業に専ら英国捕虜を使役に夜間作業を行った。そ

の際、数名の捕虜が水没し、その犠牲者を丁重に取り

扱ったはずだったが後日これが問題となった。終戦時

に進駐してきた捕虜たちによる首実検が行われたが、

当時、作業隊長であった自分は、事実証明書を提出してあったので、自分も二回呼び出され、また、自分の部隊より十名程度点検を受けたが、いずれも無事通過した。しかし、一緒に呼ばれた輸送班の埼玉県入間郡出身の斎藤曹長は即刑務所入りとなった。後で聞いたところによると、その理由は、捕虜に対する食事の時間が遅れたという、実に簡単な理由だった。

また、昭和十八年四月ころ、初年兵教育中、突然古年次兵が嘉祥県に敵八路軍（パーロー）討伐のため出動（二龍山の戦闘）、小隊連絡下士官の甘粕伍長（藤沢市出身）が戦死した。そして一カ月後の再度の出動に、除隊間近かの戦友（十四年次兵）栗原弘伍長（東京都板橋出身）が、故甘粕の遺骨を胸に抱いて復讐戦に出動した光景も未だに脳裏に浮かんでくる。

自分が柏の範部隊（近衛第三師団）で、補充兵の架橋漕舟訓練をしているとき、原隊の楓部隊（第三十二師団）が上海に集結、濠北ハルマヘラ島に出帆したが、昭和十九年四月、ルソン島北西バシー海において敵潜水艦の魚雷攻撃を受け、輸送船「第一吉田丸」は沈没、

工兵第三十二連隊・手塚大尉以下一二〇名は全滅。その生き残りの一期先輩の岩井栄吉小隊長（千葉県木野出身）もモロタイ島斬り込みで戦死した。

ハルマヘラ島へ原隊追及のためジャワ島スラバヤまで一緒にいた福田金太郎少尉が輝命により急遽重要書類携行マカッサルへ重爆撃機で出発、私物を整理して飛行場へ見送った。

なお、終戦後、英国軍が仏印に進駐するについて、英国のロー中佐が、日本軍が利用していた建設資材の調査に単身でくるから案内するよう指令があり、当時兵器廠の機材課長であった自分が案内役を命ぜられ、当方も単身で刀も官物の九五の軍刀着用、廠長の乗用車で西貢の飛行場に出迎え、地区の建設用資材を案内したことも一生忘れられない。

特に、終戦時の仏印には印度インパール作戦で後退してきた将兵が多数集結していた。それら将兵と各兵団との引き揚げ業務のため、各兵団より将校が一名づつ派遣され、聖雀に乗船処理班が編成され、各部隊の配船、乗船順位等区分処理業務に従事した。

ジャワ島スラバヤからマレーを通過、仏印・西貢まで下士官以下八五名を列車輸送中、上級将校が単独で何名も同乗しているにもかかわらず、部隊を掌握しているものが長距離での命令を下達しなければならぬ苦勞も忘れることができない。

## スマトラ・タイ警備日誌

和歌山県 西畑 耕

昭和十四年四月、現役兵で和歌山の歩兵第六一連隊補充隊歩兵砲中隊に入隊、昭和十八年十月に宇品からスマトラに向け出発、スマトラ島の警備に従事し、終戦の年の一月タイに移動しました。

昭和二十年八月十五日にポツダム宣言を受諾、有史以来初めての敗戦の日を迎えました。翌二十一年六月十九日浦賀に上陸し、長いような短いような軍隊生活の終止符を打ちました。

入隊当時は緒戦の大勝の余韻もあり、初年兵教育に

も気合がかり、こんな訓練が激しいなら一日も早く外地へ行った方がよいなどとのんきなことを考えたこともありました。

今の若い人には想像もつかないでしょうが、往復ビンタ、対面ビンタ、長時間の腕立て伏せ、鶯の谷渡りなどなど想像を絶するような体罰がありました。

初年兵教育が終わり、十月に一等兵に進級しました。こうなればしめたものです。星一つの差は天と地の差です。テレビでよく見る入牢者の差別のようなものです。食事は上げ膳、据え膳、洗濯はいつの間にか初年兵がしてくれてくれる。一般世間とは全く異なった世界です。今考えると、いい習慣とは思いませんがね。

訓練と教育で一年経ち、第二歩兵砲小隊に編入になりました。

外地には戦闘が目的の部隊と、警備を主目的にする部隊があります。

昭和十八年十月九日宇品港を出帆、十一月四日にスマトラ島のペラワンに上陸しました。インドネシアは緒戦に英蘭軍を制圧してから戦闘らしい戦闘もなく、